

次のスライドから試行4が始まります。「試行4の終了です」というスライドまで音読を続けてください.

「ああ、鎮めたまえ、荒れ狂う流れを！時は刻々に過ぎて行きます。太陽も既に真昼時です。あれが沈んでしまわぬうちに、王城に行き着くことが出来なかったら、あの佳い友達が、私のために死ぬのです。」

濁流は、メロスの叫びをせせら笑う如く、ますます激しく躍り狂う。

浪は浪を呑み、捲き、煽り立て、そうして時は、刻一刻と消えて行く。

今はメロスも覚悟した。

泳ぎ切るより他に無い。

ああ、神々も照覧あれ！濁流にも負けぬ愛と誠の偉大な力を、いまこそ発揮して見せる。

メロスは、ざんぶと流れに飛び込み、百匹の大蛇のようにのた打ち荒れ狂う浪を相手に、必死の闘争を開始した。

満身の力を腕にこめて、押し寄せ渦巻き引きずる流れを、なんのこれしきと掻きわけ掻きわけ、めくらめっぽう獅子奮迅の人の子の姿には、神も哀れと思ったか、ついに憐愍を垂れてくれた。

押し流されつつも、見事、対岸の樹木の幹に、すがりつく事が出来たのである。

ありがたい。

メロスは馬のように大きな胴震いを一つして、すぐにまた先きを急いだ。

一刻といえども、むだには出来ない。

陽は既に西に傾きかけている。

ぜいぜい荒い呼吸をしながら峠をのぼり、のぼり切って、ほっとした時、突然、目の前に一隊の山賊が躍り出た。

「待て。」

「何をするのだ。私は陽の沈まぬうちに王城へ行かなければならぬ。放せ。」

「どっこい放さぬ。持ちもの全部を置いて行け。」

「私にはいのちの他に何も無い。その、たった一つの命も、これから王にくれてやるのだ。」

「その、いのちが欲しいのだ。」

「さては、王の命令で、ここで私を待ち伏せしていたのだな。」

山賊たちは、ものも言わず一斉に棍棒を振り挙げた。

メロスはひょいと、からだを折り曲げ、飛鳥の如く身近かの一人に襲いかかり、その棍棒を奪い取って、「気の毒だが正義のためだ！

と猛然一撃、たちまち、三人を殴り倒し、残る者のひるむ隙に、さっさと走って峠を下った。

一気に峠を駆け降りたが、流石に疲労し、折から午後の灼熱の太陽がまともに、かっと照って来て、メロスは何度となく眩暈を感じ、これではならぬ、と気を取り直しては、よろよろ二、三步あるいて、ついに、がくりと膝を折った。



立ち上る事が出来ぬのだ。

天を仰いで、くやし泣きに泣き出した。

ああ、あ、濁流を泳ぎ切り、山賊を三人も撃ち倒し韋駄天、ここまで突破して来たメロスよ。

真の勇者、メロスよ。

今、ここで、疲れ切って動けなくなるとは情無い。

愛する友は、おまえを信じたばかりに、やがて殺されなければならぬ。

おまえは、稀代の不信の人間、まさしく王の思う壺だぞ、と自分を叱ってみるのだが、全身――萎えて、もはや芋虫ほどにも前進かなわぬ。

路傍の草原にごろりと寝ころがった。

身体疲労すれば、精神も共にやられる。

もう、どうでもいいという、勇者に不似合いな不貞腐れた根性が、心の隅に巣喰った。

私は、これほど努力したのだ。

約束を破る心は、みじんも無かった。

神も照覧、私は精一ぱいに努めて来たのだ

動けなくなるまで走って来たのだ。

私は不信の徒では無い。

ああ、できる事なら私の胸を截ち割って、真紅の心臓をお目に掛けたい。

愛と信実の血液だけで動いているこの心臓を見せてやりたい。

けれども私は、この大事な時に、精も根も尽きたのだ。

私は、よくよく不幸な男だ。

私は、きっと笑われる。

私の一家も笑われる。

私は友を欺いた。

途中で倒れるのは、はじめから何もしないのと同じ事だ。

ああ、もう、どうでもいい。

これが、私の定った運命なのかも知れない。

試行4の終了です.